

遠藤周作 「アデンまで」 論

—— 留学体験と疎外されるという絶望 ——

李 英 和

1、問題の所在

遠藤周作の「アデンまで」(三田文学)昭和二十九年十一月は、三年間のフランス留学を途中で切り上げ、母国に帰る日本人留学生〈俺〉という人物が船旅の途次イエメンのアデン港を目前にした時点まで書き付けた「日記」という形式で展開される自伝的色彩の濃い小説作品である。

自伝的というのは、作者遠藤自身も昭和二十五年六月に留学した経験と重なることにもとづく。しかし遠藤の留学は昭和二十八年二月渡仏中に健康を害したため、三年間にわたるフランス留学から帰国せざるをえなかつたのだが、この小説におけるフランス留学に挫折して日本に帰る留学生という人物設定や、物語時間などがそのまま作品世界と符合するところが多く、作者遠藤自身のフランスでの留学体験が作品世界に色濃く反映されているからである。したがって、作者の伝記的事実との一致というところから「アデンまで」という小説作品は、フランス留学が遠藤周作にとっていかなる意味合いを持つものであった

かを考える際に避けておろすことのできない伝記的作品といえる。むろん、これまでの先行研究もこのような視座からしばしば論じられてきた。そのなかには、たとえば〈この作品のモチーフはあきらかに「人種問題」である¹⁾〉とか、〈白色人種と有色人種との間には絶対に越えがたい断絶があるという、遠藤の絶望的確信が生み出した作品²⁾〉とか、あるいはまた〈肌の色による非条理〉と〈黄色人種としての神の探求³⁾〉といった見解が提示されている。

しかし、これらの見解はいずれも「アデンまで」の作品世界に対するテクスト論を表層の文脈でとらえた解釈といわざるをえない。そういわざるを得ないのは、この作品テクストの重要な文脈における暗喩的象徴的表現ともいべき文脈を見のがすか、あるいはその解釈を回避しているからである。それゆえに、当然のことながら、当時の作者遠藤の心境も的確には捉え得ていないと思われる。暗喩的象徴的表現の解釈がもたらす意味は、「アデンまで」の〈俺〉という人物が、ヨーロッパ人(フランス)のオリエンタリズムに接することで、強い他者認識と自己疎外の経験をしていくところにあるかと思

のだが、これまでの研究ではその点が言及されることはなかった。

そこで以下、本稿では「アデンまで」の重要な文脈を構成する暗喩・象徴の表現にことさらに集中して読み解いていき、〈俺〉という人物の他者認識と自己疎外の体験とはいかなるものであったかをとらえ直し、そのうえで、作者遠藤周作に与つてのフランス留学が、彼の作家的始発の中でどのように意味づけられていたかを改めて考えてみようと思う。

2、ヨーロッパ文明・文化からの自己疎外

小説「アデンまで」は、「チバ」という人物の「マルセイユ」からアラビア半島の港町「アデン」を目前にするまでの「マドレーヌ」船上における何日間にもわたる〈俺〉と自称するものの日記という形式をとった小説である。船上での現在の時間と回想の時間が混じっているため、このテクストが「日記」であることを知らされるのは、作品のほぼ後半部にさしかかるあたりの「俺がこの日記を書いているのは午後三時、船艙の窓から、もつともきびしい午後のアフリカの陽がさしこんでいる。」^①という、〈俺〉がどのような表現方法を用いているかを知らせる箇所による。

小説の構成に注意すると、テクストの中に一行空けが施されているところが八箇所ある。そこに大きな断絶があることを示そうとしているとみてよい。それを列挙すると、①〈チバ〉がヨーロッパを去る日の前日から出発当日の朝、白人女性（恋人）

との別れ、②マドレーヌ号に乗船して同じ四等客室での病気の黒人女性発見、③白人女性（恋人）との出会いの回想、④白人女性とリヨンへの旅の回想、⑤白人女性の幼馴染みの家での体験の回想と船医による黒人女性の診察、黒人淫売婦の見世物体験の回想、⑥リヨン旅行後の白人女性と〈俺〉との関係の回想、黒人女性の隔離室行き、⑦スエズ運河に入つてからの描写とヨーロッパに渡つてきた当時の回想、⑧黒人女の死と水葬、という構成となつていて、それがいかにも日記風の短い断想と現実描写との交錯という形式で語られていく。

テクストの一行空けは大きな断絶といったが、むしろそれぞれの断章による「日記」の書かれた時間の違いを示すものとして機能していると思われる。すると、この小説「アデンまで」は〈俺〉が今ヨーロッパを離れ日本に向けて旅立とうとする場面に始まり、帰国の途次の現在の時間に生起する暗い船底の四等室の出来事とその中で断想されるヨーロッパでの三年を思い起こすという全体像を見せていることになる。

「問題の所在」で指摘したように、本稿はこれまで注意されてこなかった暗喩的象徴的表現を解説することから作品テクストの主題を考えるとところから始めたいといつておいた。それはこの小説の構成によると、後半部で〈俺〉がヨーロッパを離れる意味を考えるとところにある。そこで本稿はストーリー・ラインをたどるといふ方法を一旦離れて、この後半部の問題箇所の考察から入ることにしよう。

帰途の船上で、〈俺〉は「ひどく暗い。のみならず耐えがたいほど、暑い」船底の「四等」室で何日間かを過ごすことにな

る。これといつてすることがないままに留学時の回想と現在の自分の心境を語ることになるが、現在と過去という時間の隔たりにから〈俺〉が時間の経過とともに変貌していくのだが、その心境の隔絶を省察するところにこの小説の主題があるはずだ。そして時間の経過はヨーロッパから遠ざかり、非ヨーロッパのアラビアの〈アデン〉に近づくことも重なっている。執筆時点現在の〈俺〉の心境と、物語内現在の〈俺〉の心境の変化を中心に、この後半部に近い箇所において〈俺〉が何を考え、どう変貌していくのかを見てみたい。

〈俺〉はどのようなイメージをもつてヨーロッパ留学に発つたのか。留学のためヨーロッパへ向かった時、「あの時、俺はまだ、自分が黄いろいという事をそれほど思つてみたことはなかった。パスポートに俺は日本人と書き込んだが、その日本人は白人と同じ理性と概念とを持った人間だった」。このように、三年前のことを回想する〈俺〉にとつて、ヨーロッパ(フランス)への旅立ちに二つの思いが潜んでいたことがわかる。その一つは、「人種はみな同じだ」と思つていたことであり、いま一つは、それゆえに〈俺〉は何の差異もおぼえることなく、ヨーロッパの歴史と文化の中に素直に溶け込めると思い込んでいたということである。そこには昭和二十五年という戦後日本の現状への絶望と、そこから脱出し、まったく新たな文明世界へと入り込めるといふ希望があった。いまだ戦後という時空間を脱け出していない日本は破壊と貧困の只中にあり、〈知〉の高い青年にとつてはそこは非文明的非文化的な暗闇の時空間であつて、そこから脱出することは大きな希望だつたとみてよか

らう。

いわば青年としての〈俺〉は文明とか、文化とかがどういふものかにはまったく無_レ空虚な存在だつた。したがつて〈俺〉に書き込まれる日本人とは、ある意味で、記号にすぎなかつた。しかし三年間の留学体験を通して、無_レ空虚ゆえに異文明のヨーロッパの歴史と文化の中に溶け込めると信じ切つていたのだが、それが「幻影」であることを知らされることになる。その幻滅が作品世界を覆うトーンになつている。

帰途のために乗つた貨物船は、それ自体がヨーロッパを表象しているものであつて、黄色人である〈俺〉と、〈俺〉が注視せざるをえない黒人女性船客であるにも関わらず、船上の白人の船員たちから「荷物」かそれよりも下等に扱われている。しかし「スエズ運河」を通つた時あらわれた茶褐色の砂漠の風景を眼にして、それまでの怒りと失望に浸つていた「黄いろい肌をもつた男」の〈俺〉は、「砂漠」と「駱駝」の風景に「たまらない郷愁」を抱く。ここに〈俺〉の心境の変化を見ることは容易だろう。しかしその表現は暗喩と象徴が集約されてい

る。だれも歩いていない。いや、一度だけ、俺は、一匹の駱駝が主人もなく、荷もおわず、地平線にむかつてトポトポと歩いてのを見た。砂漠は広いので、駱駝はやがて小さくなり、遂には一点と化してしまふまで、見えていた。その風景は、俺の胸をせつないほど、しめつけた。なぜだが、わからない。(二二頁)

歴史もない、時間もない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂の中を一匹の駱駝が地平線にむかつて歩いて居る風景が、それはなぜか知らぬが、俺にはたまらない郷愁を起こさせる。俺にはその理由は分らないけれども、この郷愁は黄いろい肌をもった男の郷愁なのである。(二三頁)

〈俺〉は今、眼に見る砂漠の風景と比べて、三年前ヨーロッパに渡ってきた当時の思いを回想してみるが、これほどに感動をした覚えはない。なぜなら「あの時、俺はまだ、自分が黄いろいという事をそれほど思つてみたことはなかった」「色の対立について想おうともしなかった」からであると、その理由を明らかにしているからである。

それが、今ふたたびアデンの港町に近づくにつれて、〈俺〉は「砂漠」と「駱駝」の風景に「たまらない郷愁を起こさせる」。そして「この郷愁は黄いろい肌をもった男の郷愁」であるとは、日本人としての自己を抑圧する色として機能していた「黄色」という肌の色を絶えず意識することが解放されてポジティブな視線で見つめかえすようになったということだろう。

では、何がポジティブなのか。むしろ「歴史もない、時間もない、人間の営みを全く拒ん」でいるとはネガティブと言わざるを得ないのではないか。「時間もない」とは人間存在が歴史性をもたないということ、つまり歴史にアイデンティティをもたないということであろう。それこそが非ヨーロッパ的な砂漠の風土そのものなのである。ヨーロッパ的文化、芸術もな

い、まさに文明と対立する〈自然〉の世界に入ったと感じたわけだろうが、しかしそのように見る〈俺〉のまなざしは、逆に一面的なヨーロッパ的視点が捉えた風景にすぎないということを知る必要がある。それがどういふことかといへば、〈俺〉は今になってはじめていままでヨーロッパに没入し、ヨーロッパ人になり切ろうとする倒錯した愛情をもっていたことに気づいたということではなからうか。戦後の荒廃した日本を放立つた〈俺〉はまさに空無な状態でフランスに入り込み三年間を過ごした。それはヨーロッパ文化を空無な内面に懸命にとりこもうとした、いわば自己という空無な記号に意味を満たすことで自己を実体化しようとした〈知〉の営為といつてもよからう。

ところが、そこで〈知〉とはほど遠い身体による差別を受け、そのために解消しようのない劣等感を感じるなどして、ヨーロッパの歴史と文化から自己を疎外させざるをえなかった。そこに大きな断絶による絶望の経験がつのつていったにちがいない。日本を拒絶して空無化したと思つていた自己が日本人という実体であることを思い知らされ、自分の他者性しか確認できなかつた。結局、そこへ入り込むことができなくなった〈俺〉は、自分からヨーロッパを飛び出してしまふ。それは自己の他者化の認識であり、ヨーロッパ文明・文化からの自己疎外であつた。

ヨーロッパを離れてアデンに近づくにつれて、〈俺〉がはじめに眼にしたのがこの砂漠である。それでは〈俺〉が砂漠の風景に「たまらない郷愁を起こさせる」といふのは何であろうか。そのためには、いま一度文脈にもどつて〈俺〉の眼に映つた海

の描写を見てみたい。地中海の「蒼く冷たい海」はスエズ運河を入ってから、「砂漠と同じような色」で「無感動な無表情な」海となり、「影もなく、光もなく、鈍く、衰弱した黄濁色をおびている。そこには歴史も時間も神も善も悪もなかった」という海へと変わったのである。〈俺〉はこのような「海」に葬られた黒人女性が、死後「裁きも悦びも苦しみもないこの大いなる砂漠と海との一点となることを知っていた」。彼女は彼女のアイデンティティの属する風土へと帰って行くのである。「裁き」「悦び」「苦しみ」は、いかにも作家遠藤の教養にふさわしいカトリックの世界観を思わせる言葉であるが、黒人女性が「死後」それらのない「大なる砂漠と海の一点となる」とは、非キリスト教的な他界へと帰一するということである。〈俺〉はそのような他界が厳然として存在していることを確信する。

とすれば、〈俺〉にとつて死者の霊を悼む「白人の祈祷」は「乾いた意味のない音としか聞えなかった」はずだ。もはや〈俺〉には、白人の世界で語られる言葉を「音」としてしか捉えなくなっていることに注意する必要がある。ヨーロッパ人の「言葉」がヨーロッパ人とのコミュニケーションの機能、それも異民族・異文化間の交流の機能を失ったことを示唆する。

このような〈俺〉の認識からすれば、ヨーロッパ人の視線から見た砂漠とは異なる砂漠の豊穡と親和を直観したというべきであろう。それは〈俺〉にとつて非ヨーロッパ的世界を生きていかざるを得ない自己の確認ということでもあろう。このような後半部がこの小説を難解にしている。作者遠藤周作の始発期におけるヨーロッパ体験が果してどのような意味と価値を持つ

ていたのか。問われるのは特殊・個別と普遍の差異であり、差別と同一、すなわちそのヨーロッパ文明・文化からの自己疎外であり、アラビア半島のアデンの発見に他者としての文明を発見したということであろう。

3、〈俺〉のヨーロッパ体験

チバの〈俺〉が白人女性との出会いを回想する場面で、作中人物の〈俺〉はフランスへ留学に来ており、胸の病を患って入院したことがあることを読者は知らされる。〈俺〉がいつフランスへ来たのかは、白人男性と白人女性との対話、また〈俺〉と白人男性との対話を通して、第二次世界大戦後の間もない頃であることが推測できる。

本稿は前節での主題の確認からいっても、この小説の意味と価値を作者遠藤の小説家としての始発と重ね合わせて考えようと思う。というのは、この小説では個別と普遍が作者遠藤のアイデンティティに突きつけられていると思うからである。そのことが作者とキリスト教の関係を考えるうえで大きな意味があると見るからだ。この問題こそ作者遠藤にとつてキリスト教は果たして普遍なものかそれとも個別なものかといった重い課題を突きつけるようになる。

作者遠藤には〈俺〉と同じ留学体験があることはすでにふれた。その三年にわたるフランス留学をどのような心境で過ごしたのか。遠藤自らこのことについて、エッセイや短編、座談会などを通して数多く語っていた。それがそのまま直ちに小説

「アデンまで」の〈俺〉を作者の等身大の自画像とみるわけにはいかないが、多くのエッセイや作品に、その留学体験をめぐる様々な経験について語っていて、そこにはその当時、彼が留学のため日本を旅立つ時から、白人のボーイから受けた軽蔑をはじめ、途中の寄港地で受けた侮蔑と取り扱いなどが描かれていることからすると、作者と〈俺〉とは二重写しになっているとみてよからう。その一例を挙げると、遠藤は一九五〇年六月、マルセイエーズ号の四等船室に乗り込んで横浜港を旅発つ。彼は乗船後三日目に、調理場に夕食をもらいに行つた時、白人のボーイから突き飛ばされ「汚い黄色人」といわれる軽蔑を受ける。この時、遠藤は、自分が四等船室客であつたからかも知れないと思うが、このような経験はフランスに着いてもたびたび経験することになって彼に衝撃を与える。

それはかりではない。戦犯国の国民であるため、ほとんどの寄港地で鋭い眼で睨まれ、他の客のように下船することもできなかつた。途中の寄港地であるマニラでは、日本人であるという理由だけで、甲板の上に並ばされ、フィリピンの将校と兵士から取調べを受けなければならなかつた。また、寄港地の市民からも罵られ、三日間船荷のあいだに隠れていた。このように遠藤は、フランスへ旅立つ時から、屈辱と悲哀を味わわされるが、それは、観念的に理解していたヨーロッパとの激しい距離感が生じる始まりでもあつた。それらの経験に加えて、フランスで肌の色をめぐる差別を直接体験して、心の底にいびつな劣等観念がつきまとつたと推測される。しかしこの小説で表象されているのはその経験が時間の推移と結びつけられ、空無とし

ての一個の記号と化した〈俺〉がいかにヨーロッパの文明、文化に同一化しようとして疎外されていくかのプロセスである。

〈俺〉はヨーロッパへ来てから、自分が観念的に理解していたヨーロッパを直接体験する。そこでヨーロッパの文明・文化の価値観と秩序を中心にした人間と社会との間に埋めたい距離感を覚えることになる。それは決して観念的に捉えられるのではなく、自分の肉体が黄色いということから、惨めな身体レベルにおいて距離感と劣等感が表象されていく。

この小説のモチーフは一人の白人女性と〈俺〉との恋愛であるが、そこにまさに身体レベルの差別と同一、個別と普遍の価値観が潜められていることに注意すべきであろう。そのことは〈俺〉が白人女性と「初めて唇を合わせた」時、もつと鮮明に浮き彫りにされる。〈俺〉はその時、彼女に「いいのか、本当に俺でいいのか」と問う。それは「俺はこの伸きの内側にひそむある真実を本能的に直視しまし」とするからである。彼女が肌の色の黄色い男と交わることで、彼女自身がその世界に入り込んでしまつてヨーロッパ世界から疎外されるのではないかという危惧が〈俺〉をとらえる。ところが、〈俺〉のほうが彼女との触れ合いの時、自分の無意識の中にあつた真実、―それは日本人／東洋人としての肌の色の劣等感、それゆえの自己の他者化であると読み取れるが―と直面することになる。

鏡にうつつたのは、それとは別のものであつた。部屋の灯に真つ白に光つた女の肩や乳房の輝きの横で、俺の肉体は生氣のない、暗褐色をおびて沈んでいた。胸から腹にかけ

ては、さほどでもなかったが、首のあたりから、この黄濁した色はますます鈍い光沢をふくんでいた。そして女と俺との身体がもつれ合う二つの色には一片の美、一つの調和もなかった。むしろ、それは醜悪だった。俺はそこに真白な色はなはにしがみついた黄土色の地虫を連想した。その色自体も胆汁やその他の人間の分泌物を思い浮かべさせた。手で顔も身体も覆いたかった。(二三頁)

《俺》は白人女性の体と自分の体を見比べて、自分の黄色い肌は醜いと思い、自己嫌悪に陥る。さらに、自分の肌の色に対する屈折した自虐意識は、白人に対する激しい劣等感となり、消し去ることができない。それゆえ《俺》は肌の色の違いによる劣等感によって白人女性との恋愛も続けられない。身体レベルの差別が《俺》をとらえる。《俺》にとつて白人女性との恋愛は「愛だけでは充分ではなかった」のだ。そのために彼女の愛を素直に受け入れることができない。しかもその理由を肌の色にあると認識する。《俺》は「白色の前に黄いろい自分を侮辱しようとする自虐感」に裏打ちされた快感さえ覚えてしまうのである。恋愛をしている男女の心情にあるのはまさに差異と同一である。男／女による性の結合をそこに見てとることはあたりまえのことなのに、《俺》にとつてそこに黄／白の人的劣等という価値観を持ちこまないではいられない。そのために恋愛の至高性・普遍性が《俺》の中で抑圧されるとすれば、これほど不毛な恋愛はあるまい。

こうして人種の差異の認識が歪曲されてしまえば、個別・特

殊・差別・劣等が普遍的価値をまさに無化してしまうことになる。《俺》は「俺の肌が女のそれより醜いとわかってから、自分が劣者の立場にたたされているという気持を拭うことができなない」。それは白人女性との男女関係だけではなく、白人人種そのものに対する認識として見て取れる。このような《俺》の追いつめられた内面の声には、白色人種に優越権を与える自己意識の卑小性が窺われ、しかも、《俺》の自己は常に白色人種との比較によって構築されていることが見て取れる。自己の現在が常に他者との関係において構築されるものであるならば、こうした差異化される他者を認め、それとの対他的関係において新たな自己を構築すべきだろうことはいうまでもない。しかし《俺》の場合、問題なのは、その差異化に優劣という価値観を結合してしまったことである。それゆえに小説「アデンまで」の《俺》は、肌の色の違いによる劣等感に囚われて自己をヨーロッパにとつては理解不可能な憎悪すべき他者として自己の現存在を内面化するだけである。こうして《俺》にとつて《白》という色は《ヨーロッパ》の優越的象徴であり続ける。

では、《俺》はなぜ肌の色の差異にそれほど劣等感を感じるようになったのだろうか。佐藤泰正は、遠藤の留学体験をさまざまな不安と屈辱、また民族性をめぐる深い疎外感などを経験したことであると指摘する。その指摘はすでに言及しておいたが、佐藤による遠藤の経験の分析は、この小説における《俺》が経験した境遇から析出されたものと考えてみると、確かに、作者遠藤が白色人種に抱く劣等感と、それによる疎外感が理解できないことでもない。

しかし、はたしてその理由だけで、この小説の〈俺〉が自己の肉体をそれほど惨めなものともなし、自己を他者化したのだろうか。以下では、自己を他者化せざるをえなかった〈俺〉の状況と内面の葛藤とを、一九八〇年代に入つて提起されるようになったサイドのいうオリエンタリズムの側面から考えたい。

エドワード・サイドによつて提起されたオリエンタリズムは、ヨーロッパの優越性を正当化する、あらゆる根拠を問ひ直し、その虚偽性を暴露するヨーロッパへの挑戦の言説である。そのような反ヨーロッパ的なサイドによれば、オリエンタリズムとはヨーロッパの視点から、またヨーロッパの必要によつて作られたオリエントに対する認識及び言説を指し、その認識と言説によつてオリエントはヨーロッパからはまったく理解されることのない醜悪で気味の悪い〈他者〉として位置づけられた。それは白人が有色人を劣等な人間であると位置づけることによつて、自らの優越を主張し、有色人を支配しようとした植民地主義を正当化する価値と権力の体系の一環に組み込まれたものであると理解される。オリエンタリズムそのものは一九八〇年代の新しい文化批評理論として構築されたものであるが、そのイデオロギー自体は帝国主義・植民地主義の時代に胚胎したものであることはいうまでもない。一九五〇年代に留学した折の青年遠藤周作が、自身を黄色の東洋人であることを常に意識させられたように、この小説「アデンまで」の〈俺〉も白人女性の恋人との恋愛においても自分の黄色の肉体が醜いということに絶望的な劣等感を抱き続ける存在である。なぜ〈俺〉が

〈常に意識させられるのか〉は、〈俺〉自身が白色人は黄色人である自分をどう見ているのか、もしくは自分は彼等にどう評価されているのかに拘り続けているからであるが、この〈俺〉のこだわりがいわば典型的なオリエンタリズムの内面化といつてよい。〈俺〉は黄色の劣等性を内面化させられることで、ヨーロッパ人によつてつくられたオリエンタリズムの言説から逃れることができなかつたと考えられる。

それは、黒人売春婦と病者が白人に差別されても、「黒人だもん」「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ」と思うことと同じ文脈上で理解してもよいだろう。黒人がオリエンタリズム言説を内面化することで自分を惨めなものにしたごとく、〈俺〉もその言説に囚われたのではなかつただろうか。それゆえ、〈俺〉は黒人と自分を同化させ、自分の他者性、すなわち、ヨーロッパから見られる存在としての自分に気づき、オリエンタリズムの文脈にのつとつて劣等感を覚えざるを得なかつたと思われる。特に、〈俺〉の場合、ヨーロッパのオリエンタリズムの眼差しと、〈俺〉自身の自己に対するオリエンタリズム的な眼差しによる、二重の他者化を経験することになつたと考えられる。

この〈俺〉にとつてのオリエンタリズムの内面化ということでは、この小説における〈俺〉と白人女性の恋愛にも深く浸透している。

そのうち女が俺に惚れ、俺がその愛を拒まなかつたのもこの、人種はみな同じだと言う幻影があつたからである。女

の肉体が白く、俺の肌が黄いろいと言うことはその愛情には毛頭も計量されなかつた。(中略)その時、扉に倒れ、眼をとじた彼女に俺は思わず、こう叫んだのだつた。「いいの、本当に俺でいいの、か」人種がみな同じであるならば、なぜ、その時、俺はこのようなみじめな呻きを洩らしたのだらう。(中略)その時、俺はこの呻きの内側にひそむある真実を本能的に直視しまいとした。こわかつたからだ。(二二頁)

その夜、彼女は、はじめて烈しく喘ぎ、身悶えたが、突然、眼を血ばしらせ、おおいかぶさるようにして俺の首をしめた。「貴方はわたしの奴れいよ」と女は呻いた。「奴れいになつて……」その時の俺の感覚の中にはある快感が――決して日本人の女とは味わつたことのない――疼いた。たんなるマゾヒズムの、被虐の快楽ではない。おそらく、その背後には白色の前に黄いろい自分を侮辱しようとする自虐感、その悦びがひそんでいた。(二二頁)

現代小説の恋愛が愛の不毛による人間の孤独を描こうとして《恋愛》を題材にすることはよく知られている。それにまた、性の営みそのものに現代における人間性の歪みへの告発もからまるとすれば、その暴露的な性描写が異性への自己同一を求め、合一の瞬間における互いの自己存在の確認であつたりするのだし、また異常性愛へのこだわりによる人間性の倒錯への深いまなざしでもあつたりするわけである。

この場面における黄色男性と白人女性との恋愛と性描写とは、ある意味で、この二つの主題を同時に表現しようとしている。《俺》が白人女性と合一しようという欲望は《俺》がヨーロッパ世界から疎外されたと思ひ込む孤独の癒しであるとともに、その反発としてのヨーロッパ世界への自己同一の希求でもある。しかし性愛における《白人》女性への男性の行為的優越はそのまま黄色(男性)による白人(女性)の征服であることによつて、常にヨーロッパ世界から疎外される《俺》がヨーロッパ世界への復讐としてヨーロッパ世界を《犯す》快感ともなる。まさに異常性愛へのこだわりといつてよからう。

しかし考えてみれば、本来《俺》は、文明すら荒廃した日本から脱出しようと、まったく自己を空無化して文明・文化の香り高いヨーロッパ世界に入り込むこと、《俺》の望みからすれば同一化することであつた。この小説における白人女性との恋愛は性愛の極致において同一化が果たせると《俺》には観念された。《俺》の日本脱出はこの恋愛で完成されるはずだつた。しかし互いに相手の肉体を見せ合う瞬間、《俺》は自分の黄色の肌の醜悪を思い知らされる。想念は幻滅へと変わり、孤独の癒しとしての性愛の快楽追求と異常性愛へのどす黒い欲望が《俺》を捉えてしまうのである。

それは《俺》にとつてもむなしく歪んだ行為であることはわかつてゐる。しかし当時の《俺》にはわからないことがあつた。それは《俺》が肌の色の違いという、到底越えられない特殊性・個別性に捉われて白人女性との恋愛を破綻させたとき、《恋愛》のもつ愛の至高性・普遍性をも捨て去つたということである。

そのもつとも端的な表現が〈俺〉と白人女性の呼称の問題である。〈俺〉は「日記」という形式であるため、いつも一人称の〈俺〉と称している。〈俺〉の名は、白人女性が呻いて「わたくしが貴方を愛しているだけで、チバ」と呼ぶ時、はじめて知らされる。しかし〈俺〉が白人男性に紹介された時、〈俺〉の名前は称されない。ただ「お名前を伺うのを忘れていたので」というだけで、〈チバ〉という名前で紹介されない。一方〈俺〉は白人女性の名前を一度も呼んだことがない。いつも「彼女」と称する。彼女の幼馴染みの白人男性の家へ訪ねていった時、白人男性によって彼女の名前が〈マガイ〉であることがはじめて知らされる。これは何を意味するのだろうか。〈俺〉の名前が白人男性に呼ばれないのは、〈俺〉は彼等にとつては東洋人という総称の代表／表象にすぎず、一個の対等な個性として認められないからであり、〈俺〉が白人女性を名前ではなく「彼女」と称するのは、自己を他者化したため、〈俺〉に対して優越的他者としてふるまっている白人女性の名前が呼ばなかったのではないだろうか。

いずれの場合においても、〈俺〉は劣等感による自己他者化と、ヨーロッパのオリエンタリズムの眼差しによる他者化という二重の自己他者化を体験せざるを得なかった。このことは作者遠藤周作にとつて重要な意味を持つものといつてよい。個別性とは彼にとつて風土性・民族性に強く結びつくものと理解されるようになったからである。それがなぜ作者遠藤にとつて重い意味をもつのかといえば、彼が幼いころから信仰するキリスト教とは何なのかという作者の生涯を通しての課題へとつらなつて

いくからでもある。もしそれがヨーロッパの風土・民族と固く結びついて存在しているとすれば、ヨーロッパ世界から疎外された非ヨーロッパ世界の風土と民族に属する彼がその宗教を信仰することはたして可能なのか、ということである。このような課題の浮上からしてこの小説が作者遠藤の文学的始発に位置づけられることがわかるであろう。

4、「マドレーヌ」という表象

この小説の表象において後半部の砂漠描写と白人女性との性交描写という具体が、〈俺〉のヨーロッパ世界に対する劣等感と自己の他者化という主題を前景化することになる。しかし本稿ではどうして〈俺〉の自己の他者化をオリエンタリズムの眼差しから捉えようとしなければならなかったのか。本稿の最後にあたるこの節ではもう一度それを裏付けるものとして、〈ヨーロッパ〉を象徴する「マドレーヌ」という「老朽貨物船」を取り上げて論ずる。

小説「アデンまで」の中で特に目立つのは色と触覚のイメージである。特に、作中には「白」と「乾く」という言葉がよく出てくるが、それは〈ヨーロッパ〉の表象（イメージ）として読み取れる。〈俺〉がヨーロッパを去る日、眼を覚ましたのは「白いつめたい風」を感じたからであり、また〈俺〉が別れのために握った白人女性の「その手は白く、乾いている」。さらに甲板の上から〈俺〉が見つめる海は「白い海面」であり、黒人女性の死骸を水葬する時、白人の祈禱は「もはや俺の耳には

乾いた意味のない音としか聞こえなかった。

このような表現は「マドレーヌ」という船の描写を包み込むように多く散りばめられている。例えば、船内食は「白い液体を入れたものと、二、三片の乾いたパン」であり、「船は乾いた、単調なリズムをたてて軋む」という表現がそれを端的に示す。マドレーヌの船そのものも「船体の黒いペンキは皮膚病のように所々、剥げていたし、そのほかの白い部分も、錆で赤茶けている」「マドレーヌと書いた船名の下の穴から黄色の吐瀉物のような液体」が出ている。〈俺〉がなぜそんなところに目が注がれるのかといえば、それぞれ「船体の黒いペンキ」は黒色人種を、「白い部分」は白色人種を、そして「黄色い吐瀉物」は黄色人種の象徴として読み取れるからである。しかし、この描写を人種の象徴としてより、アフリカとヨーロッパとアジアの差異／差別という前述したサイードの文化批評理論であるポスト・コロニアル的な視点で捉えると、そこに隠されている新たな意味が明らかになると思う。

〈俺〉はヨーロッパを発って帰国の途に着く船上で「あの時、俺はまだ、自分が黄いろいという事をそれほど思ってみたことはなかった」と回想する。そのために留学中の〈俺〉はつねに自分が黄色いということに劣等感を覚えるが、それが自己を他者化することであったことは、すでに述べた。そのような〈俺〉はそれではフランスで何を見、何を感じたのだろうか。そして結局のところ、なぜ〈俺〉は「階級的対立は消すことができるだろうが、色の対立は永遠に拭うことはできぬ。俺は永遠に黄いろく、あの女は永遠に白いのである」と思うに至ったのだら

うか。その延長上で「人種はみな同じだ」と考えたのに、それは幻影にすぎなかったと結論づけざるをえなかったのか。しかし本稿がそこにとどまって人種の劣等感の表出という主題だとするならば、それはきわめて非生産的な結論に陥ってしまう。したがってそこにのみとどまろうとは思わない。むしろ〈俺〉が語るこれらの言葉が疑問形の回想という〈知〉の形式をとっているところにはどうにもならない非生産的な劣等感と違うものが感じられる。

それでは、白人女性の友人の「サロンのような」家で開かれた「パティリー」と「娼婦街」で経験した見世物の場面における異人種に対するヨーロッパ人のまなざしとの間を対比して作者遠藤の別個の意図を考えてみたい。

〈俺〉は白人女性の恋人の誘いで彼女の幼馴染みである友人の家を訪ねる。〈俺〉が彼女の婚約者として紹介された時、白人の男性は〈俺〉を「一個の物体のように凝視めまわし」「皮肉と、侮蔑のこもった微笑がその口もとにほのかにかうかびあがるのを〈俺〉は確認する。ところが、彼の手は〈俺〉に向ける視線とはまるで対比的に「俺を身震いさせるほど羊皮のような柔らかい、なま暖かい掌だった」。その時〈俺〉の心境が以下のように告白されている。

「こちらは」とデデは博物館の案内人のように唇をまげ、うすら嗤いをうかべて言った。「その婚約者の……」と彼は俺の方にふりむいた。(中略)一同の視線にはあきらかに特別なものがあつた。彼等たちが沈黙のうちにとりか

す私語や嘯きが俺にははつきり読みとれた。(黄色人が白人と婚約したんだって)(そんなことってないわ)それら無言の声、無言の非難が目くばせのように、あちらの女から、こちらの男に飛びかわされた。(一六頁)

このように、フランス人男女一同の視線に「特別なもの」があるのを感じた〈俺〉は「白人はその自尊心が傷つけられない部分で俺が彼等の世界にはいるのを許した」が、「白人の女が俺を愛することは彼等に許せない」ことがはじめてわかったという。ヨーロッパ世界に住む白人にとつて黄色人種が〈外部〉からやって来て、その世界を第三者として眺めることは認めても、その世界の〈内部〉に入り込もうとして、白人女性と関係を結ぶこと、つまり同一化することは認めない。そこには厳然とした差異を互いに了解しなければならぬ。〈俺〉はその時そう認識したのである。

〈俺〉はこの白人青年が語る言葉の背後に普遍的人間関係ではなく、白人という「優越感から生れた慈悲、慈善」を感知して、有色人への傲慢な「憐憫と同情」に「とても耐えることができない」優越感を感じた。特殊・個別と普遍、差異と同一は隔絶した価値的差別によって拒否されている。隔絶の感覚が二つの人種の間には流れていたといつてもよい。以下は〈俺〉と白人青年が交わす対話である。

白人青年：「ムッシュ、お国はシナだと思えますが……」
俺：「いや、ジャップですよ。野蛮な腹切りの習慣をもった」

白人青年：「決してぼくは人種区別主義者じゃないんです。」(中略)「実際、君たちは、ぼく等と違わないですね」(中略)「顔、かたちはそんなに違つてはいませんよ」
俺：「そうですかね。どうみても日本人の顔は野蛮だと思えますがね」

白人青年：「ぼくは決して日本を野蛮な国とは思つていませんよ。」

俺：「どういたしまして。日本人は野蛮です」(中略)

「真珠湾を不意打ちしましたからね。自殺飛行機も使いましたからね。南京でなにをしました。あなたが、それを知らぬ筈、ないでしょうが」

白人青年：「でも……勇敢があるじゃありませんか。こうした行為には」(一七頁)

この対話は、肌の色の問題ではなく、ヨーロッパ世界がまなざしを向ける〈日本〉の特殊な被差別性が問題とされているが、〈俺〉は白人青年のその言葉の背後に日本人の肌の色の問題を結びつけてとらえ、特殊がそのまま差別と結びつけていつて自己卑下していくのである。オリエンタリズムの内面化がみごとにとらえられている。〈俺〉の白に対する脅威に対して、武田友寿は次のような見解を示す。

作者の分身と思われるこの小説の主人公である〈俺〉が、
〈白〉にたいしていさぐ反感は、〈白〉がすべてに自己の正当化と優越性を誇る「選民意識」をもつと同時に、その

「選民意識」が自分より劣位にあるものに「憐憫」「同情」「慈悲」を注ぐことによって二重に自己の善と神聖性を誇る、その無意識の偽善に対する怒りの感情なのである。

このように、〈俺〉の白に対する脅威を白人の「選民意識」からくる「偽善に対する怒りの感情」として捉える武田友寿の指摘はポスト・コロニアリズム的批評に属しよう。しかし忘れてならないのは、優越性とか「劣位にある」とかいう〈俺〉の意識（「反感」）は、〈俺〉がヨーロッパ世界の白人男性のまなざしを内面化した結果でもあるということである。単なる被害者意識だけで片付けられる問題ではない。そこにオリエンタリズムにおける普遍と個別・特殊の隔絶・差別の根深い困難性があることを見逃してはならない。

確かに〈俺〉は自分の肉体が黄色いということから自分を惨めなものとし、ヨーロッパ文化に埋めたい距離感と劣等感を覚えることになったと述べた。オリエンタリズム言説はまさに白人の「選民意識」からくる差別言説であり、劣等感をもっていた〈俺〉に二重の他者化を経験させる原因でもあるからである。しかしもしその意識を無制限に肥大化させれば、〈俺〉とヨーロッパ世界はもはや相互疎外の隔絶によって分断させられるだけだ。この〈俺〉が青年遠藤周作の分身だとすれば、彼の意識の中には普遍・一般といった価値観はまったく見られなかったというのであろうか。

作者遠藤自身にはヨーロッパとの距離を総括的に表わした文章がある。それを見てみたい。

このヨーロッパは日本人の感覚ではついでいけぬ何かがある。善の深さも悪の深さも、その高貴な精神もその美しい芸術も。私はわずかな歳月ではあったが巨大なその壁にぶつかり、自分とこの国々との距離感だけを強く意識するようになった。そしてその拳句「病氣になった」

遠藤の言う、ヨーロッパの「善の深さ」「高貴な精神」と、〈俺〉に対する白人の「慈悲、慈善」とは、キリスト教の〈普遍〉としての価値観を思わせる言葉であるが、青年遠藤はそれらの言葉に「無意識の偽善に対する怒りの感情」をひそかに覚えたのではないだろうか。前述した箇所で〈俺〉は、白人男性に「一個の物体のように」見られ、白人たちの視線に〈選民意識〉的なものがあるのを感じる。その後、交わした白人の言葉に「優越感から生れた慈悲、慈善」を感じるということは、そこに白人のオリエンタリズムが見出されている。少なくとも、〈俺〉はそう感知したと理解してもよいだろう。その時、〈俺〉は愛だけでは充分じゃないと恋人の白人女性に告げる。

充分じゃない。充分じゃないさ。君は俺を愛することができ。君は白人だからな。しかし俺の黄いろい苦しみは君を苦しめないじゃないか。できないじゃないか。（一八頁）

黄色人種である〈俺〉は、白人青年の言葉に潜んでいる優越感を感じた。そこに彼ら白人が価値の主体として自身を認識し

ていることを察知し、〈俺〉が白人に見られる客体であることに気づいた。〈俺〉が彼女に告げるこの言葉は、ヨーロッパ人のオリエンタリズム的眼差しに対する〈俺〉の皮肉めいた抗議であると考えてもよいだろう。ここにはすでに青年遠藤周作が白人人種の〈知〉のありようにいやおうなく気づかされている。

その白人の〈知〉のありようを確認しようとしているのがヨーロッパで認識されている、白人社会での黒人の状況を見つめる白人であり、見つめられる黒人の〈知〉のありようでもある。

〈俺〉は白人に差別されている黒人の状況を目撃する場面のオリエンタリズム的状况である。それが示されている箇所を見ると、まず、淫売婦の見世物の場面である。〈俺〉は、裏路にある娼婦街の「暗い、尿と油との臭いのもった屋根裏部屋」

で、白人と黒人の淫売婦の見世物をするが、そこは白人女性の友人の「サロンのような」家とは対照的なところにある。見世物がすんだ後、黒人の淫売婦は〈俺〉の眼に「生き物」として映され、「小さな灰色の蝙蝠のように思える」。さらに黒人の淫売婦の顔は、「その眼も、その表情も遠くの、ずっと遠くの響きに耳を傾けてい」て、ナチス収容所で「何年も飢えと拷問と死の恐怖に生きつづけて」いた「ポーランド捕虜たちの表情」を連想させる。二人の淫売婦の報酬の分配と、それをめぐる二人の対話は注目に値する。白人の淫売婦の黒人の淫売婦に対する不当な分配をみて、「三、一はひどいじゃないか」「なぜ、お前だけが三枚をとるんだ」というモリスの言葉に、白人の淫売婦は、「知らないね。その子に聞いてごらんよ」と答えを返す。それに対して黒人の淫売婦の「黒人だもん」「わしは黒人

だもん……」という声には、「動かすことのできぬ信念の響きさえこもっていた」のである。この白人と黒人の淫売婦の報酬の分配をめぐるやりとりから、白人の黒人に対する理不尽な差別と蔑視が、白人社会の底辺にまでいかに根深く巣くっているかがうかがえる。

次の場面は、〈俺〉が現時点で語る船上での出来事であるが、〈俺〉が帰途につくため乗り込んだ貨物船の四等室には病気の黒人女性がいた。彼女は白人の船医からの診察を嫌がって、「このままにしてください。このままでいたいのだ」と訴える。この診察を拒否する黒人女性は、船医に打たれる。しかも船医は彼女に対して以下のように語る。

「黒人を甘やかしちゃ、決していけませんぜ。こいつ等はねずみよりも悪賢いくせに牛よりも頑固なんですからね。彼等を口や理屈で説いたってなんにもなりませんよ。決して恩恵を恩恵と受けとりはしない。(中略)モロッコやチューニジイでも、そうだ。こちらは学校を建ててやる。病院を創つてやる。それを拒むのは彼等だからね。手がつけられませんか」(一八頁)

この船医の言葉には明らかにオリエンタリズムの典型が見出される。白人は黄色人と黒人を「自己」とは本質的に違う不気味なもの／劣ったもの／恐るべきものとして捉えており、そこにはコロニアル言説も窺われる。船医に打たれた黒人女性は重病にも拘わらず、病室にも収容されない。それは「黒人を病室

に入れると船員たちがイヤがる」からである。黒人女性の「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ」という言葉は、〈黒人売春婦〉の「わしは黒人だもん……」という言葉と重なり、〈俺〉にとって「黒」は「罪の色」として認識される。

あの女たちにとって皮膚が黒いということは、たんに黒いということではなかった。この黒人の病女も、あの淫売婦たちも、それを本能によって知っていた。黒は罪の色なのである。黒人たちは白人たちのまえで、自分たちが、いかなる境遇、いかなる世界にあつても、罰をうけねばならぬ存在であることを知っている。白人たちのすることは、どんなことでも善であり、神聖なのだ。だから、自分たちは、くるしみ、諦めねばならぬ人種であることを知っている。なぜなら、わが肌は黒く、黒とは罪びとの色だからだ。

(二二頁)

〈俺〉は「黒」という「色」を白人の差別に従わざるを得ない「色」として捉えている。ところが、自分を黒人と同じ線上で捉えてはいない。なぜ〈俺〉は黄色人と黒人を違ふ存在として捉え、あたかも黒人が黄色人より劣る存在として見ているのだろうか。ここに〈俺〉のアンビバレンスな眼差しが読みとれる。しかしこれについては後回しすることにして、ここではヨーロッパ人にとって「黒人」は、如何なるものとして扱われてきたのかをみることにする。

死を前にした黒人女性の扱いを見てみると、船医に打たれた

黒人女性は、隔離室に入れられるが死んでしまい、その「死骸を水葬することになっていた」。ところが、〈俺〉は、「死体が腐乱すると言う」のは「口実」であつて、「手数を省くため」であると思つている。「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ」という言葉しか発することができなかった黒人女性には海に葬られる。このような黒人女性の船上での扱いを見てみると、前述したように彼女は貨物船の四等室の乗客ではなく、白人たちに貨物として扱われたのではないかと思われる。

というのは、そもそもフランスにおいて、黒人売買と黒人奴隸制はフランス植民地主義、そして欧米植民地主義全体の根幹をなすものになつていた。ヨーロッパ人が如何に黒人を異質なものとして隔離してきたかは、「法の精神」を記したモンテスキューが、同書のなかで「黒人を人間と考えるならわれわれはキリスト教徒ではない」と言つていたことから推測できよう。黒人奴隸制が最終的に廃止されるのは、フランス大革命より半世紀余を経た一八四八年四月であるが、実際には一八六五年、南北戦争が終わり、奴隸制がアメリカでも廃止されるまで密貿易の形で続いていた。面白いことに、黒人売買に使われたこれらの奴隸船には、十八世紀フランスの知性や思考を反映する名前もつけられていた。「ジャン・ジャック」「ヴォルテール」さらに「社会契約」などである。チバが乗り込んだ「マドレーヌ」号の「マドレーヌ」とは、「マゲダラのマリア」のフランス名であるが、そのような神聖な響きとは裏腹の、実に陰險で非情な行為がこの船内では公然と行なわれていた。「マドレーヌ」という船名や、船長、船員、船医、修道女、皆白人のフラ

ンス人である。マルセイユを発つてから、船内はこれらの白人たちが支配しており、彼等の「俺」と「黒人女性」に対する振舞いには、白人優越神話が支配的であった。このことから考えてみると、「マドレーヌ」と名付けられた貨物船で行われている白人たちの「俺」、「黒人の女」への態度は、ヨーロッパの表社会には出ないがアフリカ、アジアに対するヨーロッパ人にくっついている本音と考えるとよいだろう。要するに「マドレーヌ」という「老朽貨物船」は、「ヨーロッパ（白人人種）」と「アジア（黄色人種）」「アフリカ（黒人人種）」の過去、すなわち植民地主義時代、帝国主義時代を表わす言葉として読み取ることができよう。さらに今も顕在しているアフリカ、アジアに対するヨーロッパ人の思考形態を象徴する事物ではないだろうか。この「マドレーヌ」が「老朽」であるがまだきちんと動いているということはそれを象徴している。その点、「マドレーヌ」という「老朽貨物船」は「ヨーロッパ」を象徴する事物としてもよいだろう。

5、結び

本論で論述してきたように、この小説は戦後の荒廃した日本を旅立った日本青年である「俺」が文明的文化的にはまるで空無な状態でフランスに入り込み、そこでヨーロッパ文化を貪欲に内面にとりこもうとした、苦闘の軌跡をたどった記録（日記）と呼んでもよいものであった。

ところが、三年間フランスで過ごした「俺」は、そこで自己

の他者化の認識とヨーロッパ文明・文化からの自己疎外を体験しただけで、そこへ入り込むことができなくなつて自分からヨーロッパを飛び出すことになつた。言い換えれば、自分が憧れていたヨーロッパ世界の文明・文化の奥底に隠蔽されていた欺瞞を見抜いたからこそ、ヨーロッパを離れることになつたともいえることができる。作者遠藤の体験はいわば両義性を帯びるものだったことを確認してきたともいえよう。そこに青年遠藤周作の苦悩の原型がはぐくまれた。本稿はそこに作家の文学営為の始発をとらえるわけだが、本稿の射程にあるのは、もちろん彼のキリスト教文学であるとすれば、この始発期におけるヨーロッパ世界の体験はその文学の問題性へと直結していくとみている。

そのキーコンセプトが遠藤周作にとつては普遍と個別・特殊という対立概念であつただろう。作家遠藤周作は文明・文化の普遍と個別・特殊を、いわば日本におけるキリスト教の布教というテーマ・課題を通して思索していくことになるのは周知の事実であろう。その二項概念が対立のままであるか、止揚による個別の普遍化、あるいは普遍の個別化・特殊化があるのかは、単にキリスト教布教の問題を越えて世界の文明・文化と風土・民族・人間の問題へと深くつらなっているのだ。

注

(1) 武田友寿『遠藤周作の世界』中央出版社、一九六九年、九四頁。

(2) 菊田義孝『遠藤周作論』永田書房、一九八七年、六五頁。

(3) 武田秀美『アデンまで』二つの視点―「肌の色による非条理」と「黄

色人にとつての神の探求」——「作品論 遠藤周作」笠井秋生、玉置邦雄編、双文社出版、二〇〇〇年、九頁。

(4) 遠藤周作「アデンまで」一二二頁。

(5) 上掲書、二二―二三頁。

(6) 遠藤周作「遠藤周作による遠藤周作」青銅社、一九八〇年、七一頁。

(7) 佐藤泰正「鑑賞日本現代文学25 権名麟三・遠藤周作」角川書店、一九八三年。

(8) E・W・サイド「オリエンタリズム」今沢紀子訳、平凡社、一九九三年。

(9) 武田友寿「遠藤周作の世界」中央出版社、一九六九年、一〇〇頁。

(10) 遠藤周作「遠藤周作による遠藤周作」青銅社、一九八〇年、八五頁。

(11) 海原 峻「ヨーロッパがみた日本・アジア・アフリカ」梨の木舎、一九九八年。

(「アデンまで」の本文引用は『遠藤周作文学全集第六巻』(新潮社、二〇〇〇年)に拠った。)

(イ) ヨンファ 筑波大学大学院博士課程

人文社会科学研究所 総合文学)